

支援機関と大学との連携を通じた障害のある個人におけるキャリア・アップのシステムの
検証
－構造化された模擬喫茶店舗を用いた情報移行を通じて－

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
障害・行動分析クラスター
尾西 洋平

本研究は、障害のある個人の継続したキャリア支援の方法を探るために、大学において構造化されたシミュレーション場面（模擬喫茶店舗；Café Rits）を設け、特別支援学校や福祉施設との連携した実験的運用を通して有効なプロセスとシステムの在り方を検討したものである。

このシミュレーション場面は、職業訓練として個別スキルを訓練するだけではなく、特定の個人が現在、そして未来の（or これからの）行動に関してベストパフォーマンス（正の強化を受けて継続できる）を示すために、当人のセルフ・マネジメントスキルの獲得や確認、工夫といったことを含めて、それにはどのような「援助設定」が有効であるか、つまり「何」があれば「できる」のかという、次に引き継ぐための「情報（＝ポートフォリオ）」を発見・生成的に制作することを促進する目的で設定されたものである。

本研究ではシステムの検討のためにセルフ・マネジメントスキルに着目した3つの事例を扱った。システムには【1】情報の引継ぎ・【2】「できる」情報の確認・【3】次の支援者に向けての情報の受け渡しが必要となる。第1事例は、対象生徒の、発見されたがまだ不確かであった情報を模擬店舗での構造化された環境設定の中で確かな「できる」情報に更新された例であり、第2事例は、対象者のまだ達成できていなかった課題を構造化された場面で確認し行動の獲得の結果から得られた「できる」情報が更新され、次の就労先に伝えられた例である。第3事例は、対象生徒が現在持っている行動レポーターを自発（また、それを発見）し、対象生徒の今「できる」情報を確かめつつ有効な援助設定を確かめ、「できる」情報が更新され、次の課題設定に生かされた例である。

いずれのケースも対象者の新たな「できる」情報が更新された例であるが、短期間のシミュレーション場面で、継続的なキャリア支援のための「できる」情報を単に引き継ぎ確認するだけではなく、より積極的に、対象者が現在もつ「できる」情報を発見したり、現在の行動をより良い見方のための「できる」情報として生成・確認したりすることの可能性がみえた。また、短期間の実践で有効な結果を残す必要のあるこのシミュレーションからは、「できる」情報を支援者間で共有する作業を系統的に実施する必要性があり、そうした状況の中でどのような個人の情報の形式が求められるかということも、より明確化することとなった。

こうした事により、継続的キャリア・アップに不可欠と考えられる当事者のセルフマネジメントにつながる援助付きの行動を示した「情報（ポートフォリオ）」を軸としたコミュニケーションが生み出される情報移行を機能させていくためのシステムの在り方が展望された